
今、届く、あの約束

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今、届く、あの約束

【ZPDF】

Z0733E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

一人暮らしを始める前にやっていた片付け。思わぬものが思い出の中から出てきた。記憶の途切れた写真とネリネ。あれほど忘れることが出来なかつたものを、どうして俺は忘れていたんだ?

「結構あるなあ」

季節は一月も後半。外はからつ風が縦横無尽にこの町を吹き荒らし、俺の部屋の窓ガラスを揺らしている。

「一人暮らし、か。俺にも出来るんだろうか?」

学校に行けば、まだ大学受験でピリピリした空気が漂っている。その中で俺は、推薦で合格した奴らと同じように、既に卒業モード。卒業すれば専門学校。そして同時に、地元を出て一人暮らしが始まること。今まで家事なんてやってこなかつた俺は、最近になつて母親に少しずつ教えを請っていた。そして、今は引越しに向けて新住居も決定し、少しずつ身辺整理をしろと言つ親の言葉に、真新しいダンボールに、ここで過ごした十数年分の俺の荷物を、詰めていた。

「ま、何とかなるか」

学校は午前だけ授業があり、午後は一次試験対策のため、無関係者は自動車学校で免許取得や、卒業式の練習、帰宅自習など、もはや学園生活は終わっていた。何か思つていた学生生活の終わりと違つていて、随分と味気ないが、卒業式になれば少しは実感があるかもしれない。

「彼女くらい、作つておきたかったな」

部活までやつていたのに、彼女はいなかつた。制服の第一ボタンを誰かに、なんて思つていたけど、どうせ後輩も興味はないだろう。思つて悲しくなつてきた。

「向こうで作れば良いか

一人暮らしすれば、色々と便利なことも多いし。今はとにかく、片付けしどかないと。

「それにしても、多いな・・・・」

何だかんだで、漫画とかCDが多い。それに写真も結構溜まつた今まで、整理してない。箱に入れたまま放置してたつて。

「アルバムは持つて行きたいしな。先に片付けるか」

クツキーが入っていた缶を、押入れの中から取り出す。派手な装飾の缶は、昔と同じ輝きをしてる。つい中にはお菓子が入つていうな気分がして、開けるのが少し楽しみを感じさせる。

「どんな写真が入つてたっけな？」

いつか整理しようと、とりあえず適当に中に入れて仕舞つていたふたを開けると、その中に少しの隙間を残して、幼い頃からこの間までの過去の思い出が、その中には詰まっていた。

「おっ、合宿の時のか」

数枚の写真に写つているのは、合宿先の民宿で撮つた部活とは無関係の写真。ただ楽しくておかしくて仕方がなくて笑つてる部員たちの顔と自分の顔に、記憶が全て甦つてきて、昨日のよひに感じる。

「うわ、こりや他人に見せられないな」

人前じゃとも見せられないような醜態を晒す部員の姿も、今思えばこそで、その時は馬鹿をやることが楽しかつた。そんな写真が次々に出てくる。

今じゃどうしているのか分からぬ友達や、すっかり皺が増えたんだなあと思う、若い頃の両親と俺。そんな写真を見つめると、片付けの手が止まる。過ぎる思い出の記憶が、本当に楽しかつたんだなあとか、辛いことがあつたんだあと言う俺のまだ僅かな人生の軌跡に、意味があつたんだという実感が胸の中を温める。

「ん？ 何だこれ・・・・・？」

写真を取り出して、選別してると、一通の可愛らしい猫のシールで封を閉じてある手紙があつた。ピンクの封書には、そのシールがあるだけで、宛名も差し出し名も書かれてない。

「誰かに貰つたっけ？」

何となく、その見栄えは一度ももらつた事はないから分からぬが、ラブレターっぽい雰囲気を纏つてる。

「貰つたなら覚えてるんだけどなあ・・・・・」

記憶が無い。覚えてないだけかもしれないが、とりあえずこの缶

に入っているのは、俺が適当に詰めた写真ばかりだから、俺宛じゃないかもしれないが、興味が湧く。シールをそつと剥がすと、すぐに剥がれる。最近のものじゃないのだと、シールの粘着力の弱さに思つた。

「何だこれ…………？」

封を開けて開くと、中には一枚の押し花のようになつた色褪せた赤い花と、手紙と写真が入つていた。

「これって、俺だよな…………？」

他の写真に比べて、サイズの小さな写真。少しだけ色褪せて、紅茶色に染まつている。そして、そこに写つているのは幼稚園くらいの俺と、一人の女の子。生まれてから髪を切つたことが無いんじやないかと思うくらいに、腰の辺りまで髪が伸びていて、可愛らしいフリルの服に身を包んで笑つていた。

「誰だ…………？」

それに比べて俺は、キャラクターもののシャツでまるで釣り合つていらない格好だ。お嬢様と庶民が並んでいるように見えるが、どこか俺の中に、妙な感覚が生まれていた。

「これって、静ばあちゃんの家か？」

二人の後に見える庭の景色には、見覚えがある。ここ数年は行つてないが、親父の実家のばあちゃん家だ。そこに一緒に写つてることは、多分親戚縁戚関係のはず。ばあちゃんの家に回りに、友達はいなかつた。それに女の子の格好と、俺の格好。恐らく法事か何かで会した時の撮つた写真だ。

「仲の良い子つていたつけな…………？」

少なくとも、この子とは仲が良かつたのかもしれない。だつて、俺と女の子、小さな手を隣り合つて恋人繋ぎで笑つていたから。

「手紙、か。覚えてないなあ」

封書に入つている手紙を取り出す。レターセットについているような、可愛いキャラクターの描かれている手紙。どうやらこの子から貰つたものらしい。けど、貰つた記憶が甦つてこない。他の写真

は、一目見るだけで当時の情景が目の前に見えるのに、この一枚の写真からは、それが全く出てこなかつた。

「汚い字だなあ」

思わず手紙を開いて笑みが零れた。その字は明らかに字を習い始めたばかりの子供の字。でも、俺よりも綺麗かもしれない。昔の俺の字は読み物じやなかつた。この手紙に書かれている字は、今でも読める。

「ともくん・・・・・ずつと、いつしょに・・・・・いよおね」朋くん、ずっと一緒にいようねつてことか。俺の名前は朋樹。だからきっとこれはやっぱり俺宛のものだ。

「いおり・・・・・・?」

行間なんて無視した大きな字。俺と一緒にいよおね、という内容を書いたであろう、写真と一緒に写っている女の子の名前。

「いおり・・・・・・いおり?」

つて誰だ? 何か心底で燻るものがざわめきを覚えさせてくるが、当時の記憶だけが甦つてこない。どうしてだろつか? 俺は記憶力にはちょっとの自信がある。一番古い記憶は、まだ一才頃に、親父に抱かれて湯船の中で小便をしたことだ。親父が慌てていたのを覚えている。それなのに、この写真の記憶だけが、途中で橋の板が抜け落ち、先に進めなくなり、行き詰つたような感覚だけが俺に疑念をもたらす。

「聞いてみるか」

俺は写真と花を手に、母親の元へ向かつた。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけどさ」

この年になると、素直にお母さんと呼ぶことは恥ずかしくて言えない。自分の親なのに、ねえ、とかあのや、とかでしか呼べない。

「この写真の子って知つてる? 後、この花も

「ん? どれ?」

洗濯物を畳んでいた母親に見せる。

「これは、ネリネじやない?」

母親が干乾びた花を見て、そう言つた。

「ネリネ？」

そんな花あるんだ。そういえば、何か聞いたことがある気がする。

「おはようございます。お嬢様の家に近づいてたでしょ？」

「覚えてなし」

「ジム、ア、ソコ、花か

「つ！」

母親が小さく息を呑んだ。それは驚き。どうしてこんなものがあるの？ とでも言いたげな、母親の珍しい顔に、俺の中に燻つていた何かが大きくなつた。

「あんた、覚えてないの？」「

それは問い合わせだが、問い合わせじゃなかつた。俺が忘

とを確認しようとする、恐れ恐れの問い合わせ

「それだけ覚えてない

卷之三

でもかホッとしたような、そうありますます分からぬ。何でそこ
で安心したようにするのだろうか。

「Jの子、橘の叔母さん覚えてる?」

俺が覚えていないことに安堵した母親が、いきなり饒舌で聞いて

≤
Nº°

親父の妹で、俺の叔母。それは知ってるけど、この十年以上会つてない。

「叔母さんの娘よ。伊織ちゃんって書いでの。歳はあんたより二つ上だつたと想つけど」

「ふん」

やつぱりあの手紙の差出人は写真に写つてゐる伊織という子ひし

い。

「じゃあ、これって法事?」

「そうね。おじいちゃんの七回忌じゃなかつたかしらね。それ以来
は橋の叔母さんは会つてないしね」

なぜか母親が俺を見て話さない。俺を避けてるような洗濯物に向
く視線。それが明らかに俺の目には不自然だった。

「ねえ」

「うん?」

親父のシャツを畳む母親に、写真を見ながら問う。
「何で会わないの?」

率直に感じたことを聞いてみた。遠い親戚でもないのに、どうして長い間会うことが無いのか? まあ、俺も親戚に会うなんて小学校以来今までないくらいに、関係は薄い。でも、親父の妹なら、こうも長い間会うことが無いのは不思議だつた。

「・・・・・ 時間が合わないだけよ」

一瞬、手が止まり、考えてからの発言だつた。次第に大きくなる疑問。何かがあるのは間違いない。俺の直感が言つてくる。

「それより、わざわざと並びつけしない。そんな写真もつこらないで
しょ」

話を終わらせられ、俺は部屋に戻らされた。

「何かあつたのか・・・・・?」

親父たちと叔母さんたちの仲が悪いのだろうか。だから、会わないようにしている。そんな考えが過ぎつた。だから、伊織という子も知らないし、忘れている。そう考えると合点はいつた。

「でもなあ」

納得いかないものが俺の心を燻る。何故避けるのか。それには必ず理由がある。でも、俺にはそれはどうでも良かつた。関係の悪い親戚なんて良くある話だし。俺が納得出来ないのは、こんなに楽し
そうにしている俺と伊織の写真があるのに、その記憶が俺から抜け落ちていることが、どうしても納得出来ない。

「楽しいこと、じゃなかつた・・・・・?」

楽しい記憶は忘れていても、写真を見れば甦る。それが無いと言

うことは、この時に何かしら、そういうことがあったから、忘
れている。多分間違いじゃない。

「伊織と、ネリネ。それにずっと一緒に……」

写真と花と手紙。大したことじゃないと言えば、そうだけど、俺
の心はそれを気にすることを止めようとしている。

「他に何か手がかりはあるか?」

部屋に戻り、写真の束から写真を探す。誰がこれを撮ったかは覚
えていない。でも、この一枚だけが残っていると言うことはないは
ず。誰かがカメラを持っていたから、俺と伊織という女の子は、こ
うして切り取られた思い出の中に、いつまでも無邪気な笑みを浮か
べ続けている。

「少なくとも、楽しかった」

大人たちはじいちゃんの写真と花とかを飾られた部屋でご飯を食
べていた。でも、俺はつまらなくて、外に出た。ばあちゃんの家の
周りは小川や畑、大きな桜の木があつて遊ぶにはもってこいだった。
「楽しかった……？」

ふと、古い映画のような雑線に汚れた映像が脳裏に浮かんだ。
色褪せた映像が、映写機からスクリーンに映し出されるように、
俺の眼前にあの頃の俺がいた。

「いや、恐かったはず……」

笑っていたのは、最初だけだった。そつだ。乐しかったんじゃな
い。壊されたんだ。

「伊織。いおちゃん……」

パツとではないが、その名前が無意識に写真を探すついでに浮かん
だ。

「」の写真……

同じ色褪せたサイズの小さい写真を全てが甦る俺の記憶に刻まれ
たほかの写真の中に埋没しているのを見つけた。

「やっぱりだ……」

写っているのは、大人たち。誰もが喪服。法事の時の写真だ。そ

こに俺がいた。楽しそうに笑っていたさつきの写真とは違つて、人たちの後ろの端のほうで、俺は両手で目を隠して口を大きく開けている。それは泣いている。その証拠に母親が俺の頭に手を乗せている。

「いおちゃん、か

ベッドに横たわりながら、写真を頭上に翳す。横になつて見ているだけなのに、次第に大きく心底にあつた小さな灯が、熱を帯びてきた。

「痛かつたんだよな・・・・・・

よく分からぬうちに、親父に叩かれた。だから、あの写真の端っこで俺は泣いていた。思い出してきた。確かにあつた。この写真に込められた想いと、記憶が俺の中にも。

法事とかいうものに、俺は連れて行かれた。いつもと違つて、ばあちゃんの家には、朝から知らない大人たちが沢山いた。みんな似たような服を着てて、料理が沢山並んでいた。でも、子供の俺には退屈で、つまらないことばかりで我慢しきれなくなつて、外に出た。家の中とは違つて、外はいつ來ても楽しいことばかりだつた。納屋とか言うところには、見たこともない変な道具が沢山あつて、農具とか言うみたいで、遊んじゃダメと言われてた。近くには田んぼがあつて、夏はそこにたくさんのおたまじやくしがいて、それを捕まえるのが楽しかつた。

『うわあ、金色だあ』

この時期は秋。収穫前の稻穂の海が風に波を生み出していた。いつもばあちゃんの家の周りには、俺の目を輝かせるもので満ちていた。

そして、一番好きだつたのは、田んぼの近くにある大きな木。桜の木で、春はその下でお弁当を食べるのが乐しかつた。でも、秋は裸木になつてゐる。それでも、大きな木はこの桜しか見たことが無かつたから、好きだつた。

『だあれ？』

桜の木に行くと、女の子が木を見上げた。少し冷たい風が女の子の長い髪をぶわっと動かして、人形が来ているような派手な服を着ていた。

『え？』

声をかけると、女の子が気がついてこっちを見る。可愛い女の子だった。

『だれ？』

女の子が俺に聞いてきた。

『ぼく？ ぼくはともき。きみはだれ？』

『あたし？ あたしはいおり。たちばないおり』

『橘。その名前は知ってる。叔母さんが同じ名前だ。だから、この子が娘なんだと分かった。こんな田舎町でお洒落な格好をしている子はいなかつたから。伊織ちゃんが従兄妹だと知ったのは、それから随分と年月が経つてからだつたけど』

『なにしてるの？』

『みてるの。おつきな木だよ』

伊織ちゃんがまた桜の木を見上げた。

『さくらつていうんだよ。はるにたくさんはなをさかせるんだ』

伊織ちゃんは知らないみたいだから、俺は得意げになつて、桜の木のことを話した。

『そなんだ。あたしもみたいな』

伊織ちゃんが俺に近付いてきて、ニコッと笑つた。

『ねえ、ともくん

『ともくん？』

初めて呼ばれたあだ名だつた。いつもは朋樹君とかでしか呼ばれなかつたから、一瞬自分のことだと気付かなかつた。

『うん。ともきだから、ともくん』

幼い俺を指差して、そう言つ。俺はともくん。その頃の俺は、そう呼ばれることが初めてだつたから、なんだか嬉しかつた。

『じゃあ、いおちゃん』

『うん。いいよ』

いおちゃん。可愛い女の子。俺よりも少しだけ背が高かった女の子。この時は、伊織ちゃんが年上だなんて思つても無かつたし、そんなもの関係なかつた。

『ねえ、ともくん』

『なに?』

『いつしょにあそぼ。おばあちゃんの家にいてもつまらないの』

『いおちゃんも? ぼくもだよ』

『そうなの? ジャああそぼ』

『うん』

それが伊織ちゃんととの始まりだつた。

『ねえ、いいの?』

伊織ちゃんは俺よりも色々と知つていた。

『田んぼに入っちゃ、お米がだめになるよ?』

だから、当時の俺は稻穂が実りだと言つことを理解していなかつた。伊織ちゃんはそこへ入ろうと誘う俺に、ちょっと待つたをかける。

『へいきだよ。ぼくいつもあそんでるもん』

でも大人の体じゃない、小さな体だから、稻穂の中に入つても実りで垂れる黄金の稻を倒すことが無かつたから、大人にも叱られることはなかつた。

『ほらつ、いおちゃん』

『わつ』

先に田んぼに入った俺の胸の辺りまで稻が包み込む。少し力ササしているけど、柔らかい感触が気持ち良かつた。だから、いおちゃんにもそれを感じて欲しくて、俺はあぜ道で立ち竦んでいるいおちゃんの手を掴んで、引っ張り込んだ。

『おいかけっこしょ。ぼくがにげるから、いおちゃんはおこね』

『あたしがおに?』

本来なら、男が追いかける側だらうに、当時の俺は伊織ちゃんを鬼した。ただ楽しければそれで良かつたから、ませた真似なんて思いつくはずもなく、俺はそのままいつつと、田んぼの中を駆け出した。

『あつ、まつてよ。ともくんっ』

稻穂の海に浮かぶ、二つの小さな体。逃げる俺を、動きにくそうな服の伊織ちゃんがおいかけてくる。

『おーにさん、こつちだ』

『ともくんはやいよお、まつて。きやあつ』

『へ?』

いきなり後から伊織ちゃんの悲鳴が聞こえて、振り返ると、そこにはいたはずの伊織ちゃんがいなくなっていた。

『いおちゃん?』

サラサラと稻穂が波打つ。見渡す限り、そこには黄金の稻穂だけで、その中で俺しかいなかつた。

『いおちゃんどこお?』

急に一人になって、不安が俺を煽る。俺は稻を搔き分けながら来た道を戻る。

『わつ!』

『うわつ!?』

ガサツと俺の田の前に、ばあつと、いおちゃんがジャンプして稻の中から飛び出してきた。いきなりだつたから、俺はびっくりして稻を巻き込んで尻餅をついた。

『えへへっ、ともくん、つかまえたつ』

いおちゃんがこけた俺に、タッチした。

『いおちゃんするいんだあ』

こけたいおちゃんが、探しに来た俺をそのまま捕まえた。俺はそれが悔しくて、頬を膨らませた。

『さくせんだもん。引っかかつたともくんがわるいのよ』

いおちゃんが笑いながら俺を見下ろす。その表情が今思い返せば、可愛い女の子の魅せた綺麗な女性の顔だつた。それでも当時の俺は、

悔しくてすぐに立ち上がった。

『「こんどはともくんのおにだよ』

『「いおちゃん、まてえ』

『「いっただよー、つかまえられるかなー?』

俺が立ち上ると同時に、いおちゃんは稻穂の海へかけだした。ほんのりとシャンプーの匂いが俺の鼻腔をくすぐるが、俺はその香りの続く方向へ駆け出した。

『「まてー」』

実りの秋で、収穫間近の稻穂田。日常世界とはまるで別世界の、俺といおちゃんしかいない、金色の大海。可愛らしく女子の子の楽しそうな笑い声と、それを追う待てえという俺の声。風に靡く稻穂が擦れ合い、乾いた音が俺といおちゃんを通り抜ける。そんな楽しい時間が、あの時は本当に楽しかった。

『「うわ、ともくん、いっぱいついてるよ』

鬼ごっこを止めて田んぼを出ると、俺の服には稻穂の屑などがあちこちに付着していた。それを見たいおちゃんが、俺の服についた屑を小さな手で払ってくれる。

『「いおちゃんもたくさんついてるよ。ぼくがとつてあげる』

それと同じように、いおちゃんの可愛い服にも沢山付いていた。だから俺も同じようにいおちゃんの服についた屑を払う。一人してお互いの体を払いあう。それもまた遊びになる。子供なんて道具がないなら、何でも、どんなことでも遊びを自ら考え付くもの。

『「つかれたね』

『「うん。いっぱいあそんだもんね』

沢山走り回ったから、俺は疲れた。鬼ごっこのは、トンボを追いかけ、近くを流れる小川で石を投げて遊んだ。それは明らかに男の子の遊びだったけど、いおちゃんは嫌な顔一つせず、一緒になつて笑ってくれた。

『「ねえ、ともくん』

一人して、ばあちゃんの家の入り口にあつたちょっとした段差で

座つて休んでいると、いおちゃんが立ち上がって俺を見る。傾き始めた日の光が、いおちゃんの後から降り注いでいた。素直にその姿が輝いていて、綺麗に見えた。

『もつかいあそこにいこ?』

いおちゃんが稻穂の中に立つ桜を指差す。

『またあ?』

どうしてまた行きたいのか、その頃の俺には分からなかつた。

『うん。たのしいことじよ?』

『たのしいことあ?』

まだそんなことがあるのか、と俺は首を傾げた。

『うん。それとたくさんおしえてくれたおれい』

『おれい?』

俺の問いに、いおちゃんはただ笑つて頷いた。もっと遊びたかつたから、俺は立ち上がりつて頷いた。

『あれ、いーちゃんに朋樹君?』

『あ、おねえちゃん』

桜の木に行こうとした俺たちの背後から、大人たちが数人出てきた。そろそろ帰る人たちのようで、ばあちゃんの家の外に賑わいが訪れ始めた。

『どうしたの、おねえちゃん?』

いおちゃんがいおちゃんの姉を見る。お姉さんの手には、ビニールでも売つてゐる使い捨てカメラがあつた。

『あつ、そうだ。いーちゃん、朋樹君。写真撮つてあげる』

すると、お姉さんが俺といおちゃんを隣同士に並ばせて、カメラを構えた。

『ほり、一人とも笑つて』

いきなりのことに戸惑つ俺をジッと見ていたいおちゃんが、不意に俺の手に触ってきた。

『ともくんつ、ほりわらつて』

『えつと・・・・・』

こきなり繋がれた手に、俺はちょっと照れていたのかもしない。その小さな手から伝わる、今日一日と一緒に遊んだ女の子の温もりがすぐ傍にあって、初めてドキッとした想いを感じたのかもしれない。

『もー、そうじやなによ。ほら、いつだよつ』

俺が相変わらず困惑しているのを見て、いおりちゃんが握っていた手を離すと、俺の顔を引張る。

『い、いひやいよお、いおりちゃん』

『こらこら、いーちゃん。つままないの』

それを見たいおちゃんのお姉さんが苦笑する。

『だつて、ともくんわらつてくれないんだもん』
いおちゃんが不満そうに俺を見る。

『うーん、そうねえ。それじゃあ、朋樹君』

『なあに?』

お姉さんが俺の前に視線を合わせるよつて顔でくる。

『今日は楽しかった?』

『うん』

楽しかった。俺の答えに、いおちゃんが安心したよつて笑む。

『その楽しかったことを思い浮かべてみて』

『うん』

頷いて、楽しかったことを思い出す。いおちゃんと奥へりつことをして、トンボを追いかけて、小川で遊んで、俺の知らない花のことをいおちゃんが教えてくれて、いおちゃんと一緒にお互いのことを話しながらあぜ道を歩いた。それは楽しかった。だから、あつといつ間だった。

『楽しいことがあると、思に出すだけでも楽しくなつてくれるでしょ?』

お姉さんの言葉に、俺は首を縦に振った。

『えへへつ、たのしかつたよね?』

いおちゃんが俺を見て笑つ。

『うんつ、楽しかつた』

その笑顔につられて、俺の顔が回じよつて破顔する。

『うん、そのままね』

俺たちを見たお姉さんが一ヶコリと笑うと、少し離れた。

『ともくん、て、つなご~』

『うん、いいよ』

いおちやんに俺は手を差し出すと、いつもは掌同士を合わせるだけの手を繋ぐと囁つ行為でも、この時は違つた。

『おちやん?』

わつときよりもいおちやんが近くにいる気がした。

『ここびとつなぎつていうんだつて。あたしたち、いっぽいあそんだからここびとだもんねつ?』

『うん?』

合わされた掌と、互いの指間に互いの指を滑り込ませる繋ぎ方。いおちやんがぎゅっと握るから、俺も同じように握り返すと、いおちやんが笑つてくれた。そしたら、俺も楽しくなつた。これが恋人つて言つものなのか、と俺はまた一ついおちやんに教わつた。

『はい、じゃあ撮るよー』

いおちやんと見つめ合つ。そしたら、今日のことが甦つてきて、二人して同時に笑みが漏れて、そのままお姉さんが呼ぶ声に、カメラを見ると、ピカッと眩しい白い光が俺といおちやんを包み込んだ。写真を撮ると、お姉さんはもうすぐ帰るよ、といおちやんに言つた。

『もうちよつとだけ。ともくん、ここ?』

でもいおちやんは、それを聞き流すと、繋いだ手をそのままに、僕を引張つて駆け出す。僕よりも足が速くて、僕はいおちやんの少し後を追いかけて、ばあちゃんの家から駆け出し、桜の木にいおちやんと何が楽しいのかも分からぬのに、楽しくなつて笑いながら一緒に走つた。

『沙織ちゃん、ウチの朋樹見なかつたかい?』

『あ、伯父さん。朋樹君ならいーちゃんとあそこです』

一人が駆けた後を、もうすぐ帰ろうとする大人の中から、一人離れた朋樹の父が、伊織の姉の沙織に話しかけた。

『全く。そろそろ帰るつてのに・・・・・』

やれやれ、と朋樹の父が沙織に礼を言つと、一人が向かつて行つた桜に向かつて迎えに歩き始めた。

『いおちゃん、なにするの?』

桜の木に来ると、俺といおちゃんは、小さな呼吸を数回繰り返して、落ち着きを取り戻す。

『んーと、さつきこの辺にあつたんだけどなあ・・・・・』

だが、いおちゃんは俺の問いかけを無視して、繋いだ手を解くと、桜の木の周りをきょろきょろと何かを探し出す。

『いおちゃん、どうしたの?』

『ひ・み・つ、だよつ』

尋ねる俺に、いおちゃんは二ツ「リ」と笑つてまた足元を探す。俺はそんないおちゃんをただ、不思議そうに見るしかなかつた。いおちゃんの髪は長いから、下を向いていると、後ろに垂れていた髪がサラッと頬をくすぐつていた。それを書き上げて耳にかけるその仕草に、当時の俺はやつぱり今と同じで可愛いな、と思つていた。今はきっと綺麗だとも思うかもしれない。初めて知つた女の子の仕草の魅力だつたかもしれない。いや、これは初めてじやない。きつと一緒に遊んでいた楽しげが、既に魅力だつたはずだ。

『あ、あつたつ』

いおちゃんが桜の木から少し離れたところで、何かを見つけた。

『なあに? これ』

いおちゃんが見つけたのは真つ赤な花。それを一輪摘むと、一輪を俺に差し出してきた。

『ねりね』

いおちゃんが楽しそうに笑う。俺にはどうしてだか分からず、首を傾げていた。

『ねりね・・・・・?』

『うん。あたしとともくんのお花だよ。』

渡されたネリネの花。彼岸花にも似ていて、幻想的な花序を作り、一つ一つの花は先端がちぢれ、波打っているような六弁花。

『ぼくとおちゃんの?』

当時も今も、どうしてネリネが俺といおちゃんの花なのか分からぬい。

『うん、だからずつともつててね』

『うん、わかつたよ』

貰つた花と一緒に見つめて、笑む。どうじてか、それだけでも楽しかつた。

『ねえともくん』

『うん?』

『あたしね、もうかえるの』

『うん、ぼくもだよ』

さつきの大人たちを見ていたら、もつ法事は終わり、俺も何となくそろそろ帰るものだと分かっていた。

『あたしね、もつとあそびたかった。ともくんとあそぶのたのしいから』

『うん、ぼくも』

そうだ。この時は、少し寂しかつた。やつと仲良くなれたと思つたら、もう帰らないといけない時間になつた。子供の都合なんて、大人にはなかなか通用してくれない。大人はざるい。そんなことも思つていたかもしれないが、実際はどうだつたかなんて、当の昔の出来事。そこまでは覚えていない。

『だからね、思い出をつくひつへ。』

『おもいで?』

思い出とは何なのか、当時の俺は分からなかつたはず。田先のことばかりが世界の全てだった。幼い子供なんて、特に男の子はそんなもんだ。だから、そんな記憶があつたことすら忘れてします。

『うん。ネリネだよ』

その言葉は分からなかつた。

『どうするの?』

遊ぶ以外に、何をしようと言つのか。俺の頭にはそれしかなかつたはず。今思えばもつと色々あつただろう。悔いの念を感じそうだ。

『ともくん、め、つぶつて』

『なんで?』

目を閉じたら、何も見えなくなつちゃうよ。そう俺がいおちゃんに言つている。そんな俺に、いおちゃんは笑うだけだつた。

『ないしょだよ』

男なんていつの時も、女には敵わない。どんなに幼くても、心の成長の早さは男が群を抜いて遅い。子供ならまだしも、大人に成つてからも子供の心を持つ多い。それが魅了にもなるのかもしないが、家族にいるとなると始末が悪いだけだ。

『ほら、ともくん、め、つむつて』

『うん』

言われるままに俺は目を閉じた。

ゆらゆらと揺れる秋の稻穂。粉に包まれた黄金の米がたわわに実り、質感を感じさせる揺れ方をしている。それに周囲を囲まれた、裸桜が俺といおちゃんを見下ろすように鎮座している。田舎の初秋の光景。

『ずっと、わすれないから・・・・・』

飛び交うトンボの群れの中に静かに佇む小さな体。ゆらりと秋風に舞う幼き少女の艶のある髪が、後に舞う。

『ずっと、いつしょにいれば・・・・・』

『いるよ』

『えつ?』

いおちゃんの驚きの声が、小さな口から漏れる。

『ぼくは、いるよ。ずっとずっと』

『ともくん・・・・・』

どうしてそんなことを分からぬまま言つたのか、分からぬ。
少しばかり格好をつけようとしたのかもしない。不安そうな声が、
折角過ごした楽しい時間には相応しくないと思つたのかもしない
が、分からぬ。

『うん、ありがとう・・・・・・』

伸ばされた二つの小さな手が、幼い俺の頬を包み込む。冷涼な風
の中に感じた、小さな温もり。生まれて始めて感じる、家族以外の
異性の温もり。

『んつ・・・・・・』

分からなかつた。自分の唇に感じたものを。

『お前たちつ！ 何してるんだつ！』

その時だつた。びくつといおちゃんの体が震えて、温もりが解け
た。その声が聞こえたほうを振り返ると、初めて見る、親父の怒つ
ている顔があつた。ほんの少しだけの、幼い子供でいられた甘く温
かな時間が、終わりを迎えた。

俺がその時、最後に覚えているのは・・・・・・・・。

「そうだつたんだな・・・・・・」

頭上に翳す写真の記憶が、全て甦つた。

「あれが、初めて、だつたんだな」

今だからこそ、苦笑が漏れる。その苦笑が向くのは、もちろん当
時の俺に対してだ。

「泣かせちゃつたもんな」

俺も泣いた。親父に初めて叩かれた。痛くて泣いた。でも、それ
以上にいおちゃんが泣いている顔が、一番強く甦つて、閉じた瞼の
裏に焼きつく。

「情けないなあ、俺」

今思い出しても、痛い。それは親父に本氣で叩かれたことじやな
い。幼いからと言えば、それまでかもしれない。それでも、一人の
女の子を、初めて会つたのに、あんなに仲良くなれた女の子を、最

後まで笑顔でいてあげられなかつた」とに対する痛みがある。

「いおちゃん・・・・・・・・」

俺と一緒に写る写真。本当に楽しそうな笑み。俺も笑っているが、どこか緊張を隠しきれていない笑み。恐らく、照れだ。言つだけ言って、何も知らない、何も出来なかつた俺にもあつた、ませた男心。「下らねえな、つたく・・・・・・・・」

今更なことだらう。それでも、この少女の思いを俺は忘れていた。

大馬鹿野郎だよ、俺は。

次々に浮かんでくる後悔。女心は纖細だ。だからと言つて、男心が大雑把ではない。むしろ男の方が、こいつに限らず、もつと女々しさを残す。男だつて結構纖細、いや、だいぶ纖細だ。

「ずっと、一緒だよ」

手紙に書かれたその文字を、何度も田でなぞる。いおちゃんが、どんな気持ちでこの手紙を書いたのか、幼い筆体からは、俺には理解してあげるには、黒く染まりすぎたのかもしない。だから、書かれた言葉と、甦つた、キラキラと輝き続けていたあの田の約束の温もりから感じ取る。

「今は、どうしてるんだろうな・・・・・・・・?」

もう遅いことくらいは、俺でも分かる。もしかしたら、いや、もしかしなくてもいおちゃんは、伊織になつて、こんな思い出があつたくらいにしか思つてないだらう。あの日から、それぞれ別の道を歩かされてるんだ。交わることはないだらう。

「でも、いつもらつたんだつけ・・・・・・・?」

俺の記憶では、あの日、親父に叩かれて泣きながら家に帰つて、ばあちゃん家を出る時は、いおちゃんとはもつ近付くことすら許されなかつた。なのに、この手紙と、ネリネの花と、写真が、今俺の手の中にある。不思議だつた。

「少なくとも、あの日よりも後だもんな」

俺が直接貰つた覚えはない。この写真を撮つたのは、いおちゃんのお姉さん。あれは使い捨てカメラだつたから、現像は後日。だか

ら、この手紙も全部、後に貰つたものか。俺の知らない過去が、ここにあるのは確か。

「…………聞けないもんなあ」

「この手紙、いつ貰つたやつ？ なんて母親に聞けば、さつきみたいに微妙な表情をされるし、父親はもつての外だ。法律上は問題なくとも、モラルとしての問題が根強い。だから、口に出来ない想い。子供の頃だから、そんなことは知らないけど、もうそれくらいの分別が付くくらい成長した。

「しようがないんだよな…………」

ため息と同時に、苦笑が出た。

「ネリネって結局、何だつたんだろうな？」

いおちゃんがやけにネリネにこだわっていた。手紙にも同封したくらいだ。ただ好きだからくれたわけじゃないだろう。

「はな…………花…………花言葉？」

花を連想する中で、意味がありそういうことで思い当たるのは、花言葉だった。

「知らないしなあ…………」

生憎、花には興味がない。花言葉なんてバラくらいしか知らない。「つて、あんた、まだ片付けてないの？」

「うわあっ！？」

がちや、ヒノツクも無しに母親がドアを開けた。俺はとつぜん写真と手紙を枕の下に押し込んだ。

「ノ、ノツクくらいしてくれよ

「何よ。まともに荷造りも出来ない息子のくせに

ほつとけ。こつちは大事なことを思つてたんだよ。そんなことを内心でぼやきながら、膝に落ちたネリネの枯れた花を手に取る。「ねえ、花言葉って分かる？」

「花言葉？ 何の花？」

母親が、俺が散乱させたままの写真を拾い、缶に仕舞つていく。

「ネリネ」

ばかりさんの家や周囲に沢山咲いていた花。こおちやんが俺にく
れた花。

「ネリネ？ 確か、また会つ口まで、じゃなかつたかしら？」

「また会つ口まで・・・・・・」

ドクン、と俺の中で何かが動いた。長い間巻かれることがなく、時
を止めていた時計が、ねじを巻かれ始めたような感覚だ。

「それがどうかしたわけ？」

「え？ あ、いや、別に」

母親が怪訝そうに俺を見る。俺はどうしてか、急に体が熱くなつ
て、脂汗のようなものが出てきた。緊張してる。

「それよりも、さつきの写真なんだけど」

「・・・・・・」

母親が息を呑んだ。それでも俺は続ける。へんなことを聞くつも
りはない。

「あれつて、いつ貰つた？」

「・・・・・・聞いてどうするの？」

警戒されてるなあ。別にそんなつもりはそんなにはないんだけど。
「ただの興味。それ以外はないって」

しばらく俺を見た後、母親が小さく息を吐いて緊張を解いた。

「そうねえ、確か五年前くらいだつたかしら。橘家の所の沙織ちゃんが持つてきたのよ」

「五年？ 最近じやん」

てつわり、あの後からそんなに日付が経つていない頃だと思つて
た。

「色々あつたのよ」

「ふーん」

それつきり母親は口を開けて立ち上がる。俺も興味、とだけ言
つたから、それ以上訊くに訊けなかつた。

「あんまり時間もないんだから、いる物は早くまとめておきなさい
よ」

「分かつてるよ」

ガキじゃないんだっての。何度も言わなくても分かつてる。そんなことを思いながら母親が出て行くのを見送り、ドアが閉まるとき、肩の力を抜く。

「五年前だつたんだ……」

最近も最近だ。なんでそんな時期に、この「写真と、自意識過剰かもしれないが、この手紙、ラブレターだらう。それにネリネが、また会う日まで、と書いた花言葉だなんて、もう意味は一つしかないじゃないか。

「橘、伊織……」

俺よりも一つ年上つてことは、今年二十歳か。もうあの頃のような風貌ではないだらう。

それを分かつていて、俺の心は、妙な熱を感じさせている。

「また会う日つて、いつだらうな……」

何となくだけど、どうして今まで忘れていたのか、ふと頭に浮かんだ。きっと、親父が俺たちのキスを見て、俺をぶついたこと、そして、いおちゃんを泣かせたことは、同時の俺の中では、何よりも悲しい記憶として刻まれたのだらう。

壊れそうで、大切すぎて、触れることを恐れていた一人の少女との思い出。それが何気ないきつかけで開かれてしまった、幾千の夢と想いを閉じ込めていた缶を開いたことで、悠久に止まるはずだった時間が、誤りなのか、そうなるようにひつそりと時を待っていたのか、動き出してしまった。

「どうしたら良いんだらう……」

次第に鼓動が膨らむ。抑えきれない想いが、鼓動を刻む度に、あの日の少女を強く彷彿させる。

「ずっと一緒に……」

「また会う日まで……」

俺つて、案外純情なんだな。昔のことなのに、昔は感じられなかつた想いを、今はしつかりと感じて、あの日に戻れたら、あの日の

俺にどうせさせていたかとか、今のいおちゃんがどんな女性になつて
いるかだとか、そんなことばかりが荷造りをする手を動かそうとし
なかつた。

「どこにいるのかな、いおちゃん・・・・・・

引き離された想いだからか、これまでに感じたことがないくらい
に、俺の中に、あの日の約束が無限に反芻していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733e/>

今、届く、あの約束

2010年10月8日15時30分発行